

DOUKAN YANO  
**矢野 童観**  
やの どうかん

Portfolio / Art Works



## ～ステートメント/statement～

### 私にとって「書」とは

文字を書くことに対する特別な感情は、幼少の頃に聞いた祖父の思い出話から芽生えたように思う。祖父が幼い頃は囲炉裏の灰に火箸で字を書いては消しながら教わり、できないとその火箸で手を叩かれたものだと誇らしげに語りながら、幼稚園に行かなくなってしまった私に字を書くことを教えてくれた。誉められると嬉しかった。そのお陰もあって、小学校から再び同級生の仲間入りができた。

40才を前に、仕事上の人間関係や様々な出来事に上手く対応できず役職や責任を放り出したとき、自然にまた書道をやりたいと思った。そして偶然武田双雲先生の教室に通わせていただく機会を頂いた。思い通りの線を描けない日常から逃れるように自由な書の世界に没頭し、気が付けば童観の名を授かり書の依頼なども頂くようになった。

2015年頃から「天作会」や「ART SHODO TOKYO」に接し、書家として現代アートに進出する山本尚志氏の芸術運動ともいえる活動に共感。必然的に、井上有一をはじめとする現代アートとしての書から少なからず刺激を受けるようになった。そして、自分ももっと自由で新しい書の表現にチャレンジしようと考えた。

2018年に「ART SHODO TOKYO AUTUMN」への参加が叶い、同時に勤務していた会社を辞め完全に書家として生きる決断をした。

思えば、「書」は私にとって不自由な集団や不自然な組織からの救いの場なのかもしれない。

### 作品「上下」シリーズ

2015年、「遠くて近い井上有一展」(菊池寛実記念 智美術館)で大作「上」を観たとき、「下」は無いのか？有った方がよいと思ったのをきっかけに、“上と下”の漢字2文字だけで人間の上下関係や階層、社会の構造やしくみの矛盾や違和感を書き表すようになる。仮名の省略連綿からヒントを得て、“上”の最終画と“下”の第一画を一体化させることで、どこまでが上でどこまでが下なのか分からない曖昧さも同時に表現している。書いている文字は“上と下”だけであるが、例えば、大都市を象徴する高層ビル群、企業、組織、家族、自分など、周囲の事実や出来事をモチーフとして作品をシリーズ展開している。

優位な立場で支配する一握りの「誰か」にとっての利益や生産性が「モノサシ」で、それ以外の「大多数」はその構造の中に閉じ込められたり追い出されたりして更に圧倒的「上」を生み出して行く世界、社会の構造やシステム。それで良いのか？どうしたらいいのか？などと考えてみたりもするが、その答えも解決方法も見当たらず、私にはその消し去ることができない違和感や問題意識をこのようにして書き表すことくらいしかできないのだ。

### 素材と技法

粒子の粗い煤をベースに市販の青墨汁等を配合した自作ボンド墨と書道用の筆で、主に書道用の画仙紙や梱包用の再生紙に書いている。

多量の墨で書いた後、作品の表面に乾いた反故紙を重ね煤(墨)の一部を剥がし取るデカルコマニー的的手法により複雑で不自然なマチエールを生み出している。

## 経歴

- 2021年 JAPAN SHODO SHOW 渋谷ヒカリエ 8/ (ハチ)
- 2021年 JAPAN SHODO SHOW 京都王藝際美術館
- 2021年 ART SHODO FUTURE FEI ART MUSEUM YOKOHAMA
- 2021年 東京ショウドウショウ 多摩市ヴィータホール・ギャラリー
- 2020年 おとなペン字の練習帳 著 (高橋書店)
- 2020年 ART SHODO FESTA 2020 三鷹市芸術文化センター
- 2020年 現代アート書道の世界 2 YUMIKO CHIBA ASSOCIATS
- 2019年 ART SHODO FESTA 2019 三鷹市芸術文化センター
- 2019年 ART SHODO AWORD 2019 品川区O美術館
- 2019年 DOUKAN SHODO STUDIO OPEN
- 2019年 童観書道教室 表参道 - 南青山 OPEN
- 2018年 ART SHODO NOW～書道の新たな展開～ ギャラリーNOW
- 2018年 ART SHODO TOKYO 2018 AUTUMN 三鷹市芸術文化センター
- 2015年～2017年 書道のグループ展、個展を都内・横浜などで自主開催
- 2014年 書道家“矢野童観”として活動開始
- 2010年 書道家武田双雲に師事
- 1968年 秋田県平鹿郡（現・横手市）増田町に生まれ、幼少から中学まで書道教室に通う

～ご連絡先～

〒107-0602

東京都港区南青山6丁目3-1 1 PAN南青山802  
童観書道スタジオ 矢野 童観 (やの どうかん)

[doukan.yano@gmail.com](mailto:doukan.yano@gmail.com)

DOUKAN YANO  
矢野 童観

2021年4月9日～18日  
JAPAN SHODO SHOW 渋谷  
渋谷ヒカリエ 8/ (ハチ)



### 「上と下の重なる部分」 2020年/2021年

富と貧、政治家と有権者、メディアと視聴者、薬と患者・・・  
一見、上下の関係にも見えるのだが、結局は互いを生み出しあいながら一体化している。  
公平、平等とはいったいどのような状態なのか？  
不公平や不平等な状態であると認定する仕組みやプロセスは、公平で平等だと言えるのか？  
そんな消すことのできない疑問や違和感を、上と下の漢字二字の重なる部分を同時に書くことで表した。



JAPAN SHODO SHOW 渋谷  
渋谷ヒカリエ 8/ (ハチ)



DOUKAN YANO  
矢野 童観

2021年3月27日～3月28日  
JAPAN SHODO SHOW 京都  
京都王藝際美術館



### 「曖昧な上と下2021」 2021年

富と貧、政治家と有権者、メディアと視聴者、薬と患者・・・  
一見、上下の関係にも見えるのだが、結局は互いを生み出しあいながら一体化している。

公平、平等とはいったいどのような状態なのか？

不公平や不平等な状態であると認定する仕組みやプロセスは、公平で平等だと言えるのか？

そんな消すことのできない疑問や違和感を、上と下の漢字二字が合体した形を書くことで表した。



JAPAN SHODO SHOW 京都  
京都王藝際美術館



JAPAN SHODO SHOW 京都  
京都王藝際美術館

DOUKAN YANO  
矢野 童観

2021年1月28日～2月13日  
ART SHODO FUTURE 2021  
FEI ART MUSEUM YOKOHAMA



### 「圧倒的な上の建物と下の家族」 2020年

開業準備をしていた2019年春。両親の上京に運転手をかって出て、皇居周辺や都心をゆっくりと観せて周るのだが、田舎から出たことが無い衰えた父の目に入るのは巨大なビル群ばかりのようで、そのストレスですぐに具合が悪くなってしまった。

その瞬間、一刻も早くストレスから父を遠ざけることが私の役目になった。





ART SHODO FUTURE 2021  
FEI ART MUSEUM YOKOHAMA

DOUKAN YANO  
矢野 童観

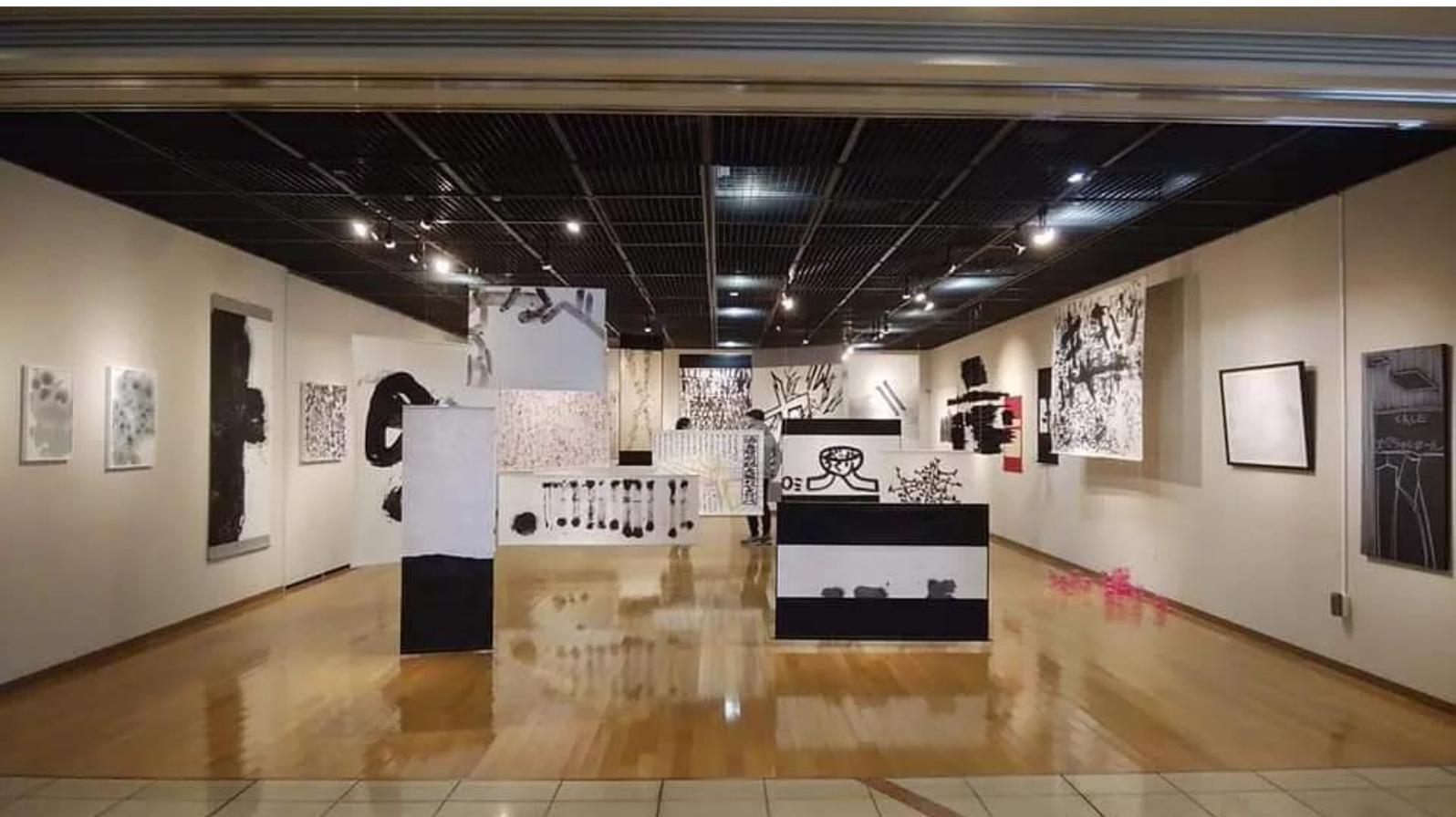
2021年1月16日～17日  
東京ショドウショウ  
多摩市ヴィータホール・ギャラリー



### 「上と下の重なる部分」 2020年

富と貧、政治家と有権者、メディアと視聴者、薬と患者・・・  
一見、上下の関係にも見えるのだが、結局は互いを生み出しあいながら一体化している。  
公平、平等とはいったいどのような状態なのか？  
不公平や不平等な状態であると認定する仕組みやプロセスは、公平で平等だと言えるのか？  
そんな消すことのできない疑問や違和感を、上と下の漢字二字の重なる部分を同時に書くことで表した。





東京シヨドウショウ  
多摩市ヴィータホール・ギャラリー

DOUKAN YANO  
矢野 童観

2020年2月8日~3月7日  
現代アート書道の世界2  
【記号と今】

Yumiko Chiba Associates viewing room shinjuku



### 「強大な5つの上とその他の上と下」2020年

世界で5つの国だけが核兵器を所有しても良いと認められている。先進国と呼ばれる強国が作ったそのルールは違和感の塊である。

2020年東京五輪の年に5という数字を題材にした作品の構想にとりかかろうと思案するも、いつの間にかこれをを書くことになっていた。

“上と下”の漢字2文字だけで、組織や集団の中の上下関係や階層、不可避な仕組みや構造などの矛盾や違和感を表している。

仮名の省略連綿からヒントを得て、“上”の最終画と“下”の第一画を一体化させることにより、上と下の2字を書きながら、本当はどっちなのか、どこまでが上でどこまでが下なのか分からなくなる曖昧さも同時に表現している。

書いている文字は“上と下”だけであるが、主に作者の周囲に起きた事実がモチーフである。これまではそれをあまり具体的に説明して来なかったのだが、今回初めて、モチーフとなった出来事も示したいと強く思いながら制作した。

優位な立場で支配する一握りの「誰か」にとっての利益や生産性が「モノサシ」で、それ以外の「大多数」はその構造の中に閉じ込められたり追い出されたりして更に圧倒的「上」を生み出して行く世界やシステム。

本当にそれで良いのか？などと考えてみたりするのだが、その答えも解決方法も見当たらず、その違和感をこのようにして書き表すことくらいしかできないのだ。

#### 素材と技法

粒子の粗い松煙の煤をベースに、市販の青墨汁やラメなどの異物を配合した自作ボンド墨と書道用の筆で、主に書道用の画仙紙に書いている。

多量の墨で書いた後、作品の表面に乾いた反故紙を重ね水分や煤の一部を剥がし取り自然な流れを阻害することによって複雑で不自然な表情を生み出している。



### 「圧倒的な上の建物と下の家族」 2020年

開業準備をしていた2019年春。両親の上京に運転手をかけて出て、皇居周辺や都心をゆっくりと観せて周るのだが、田舎から出たことが無い衰えた父の目に入るのは巨大なビル群ばかりのようで、そのストレスですぐに具合が悪くなってしまった。

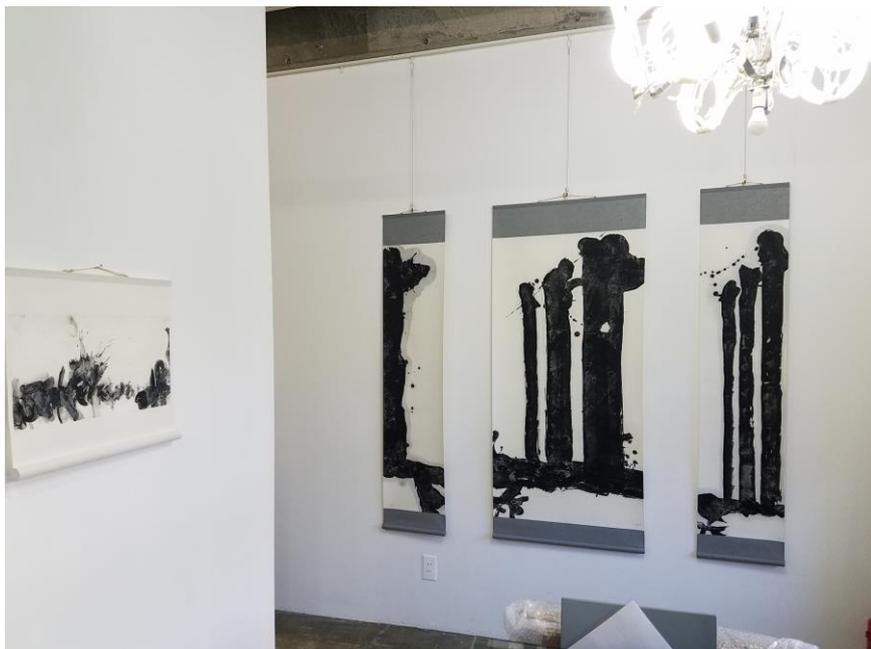
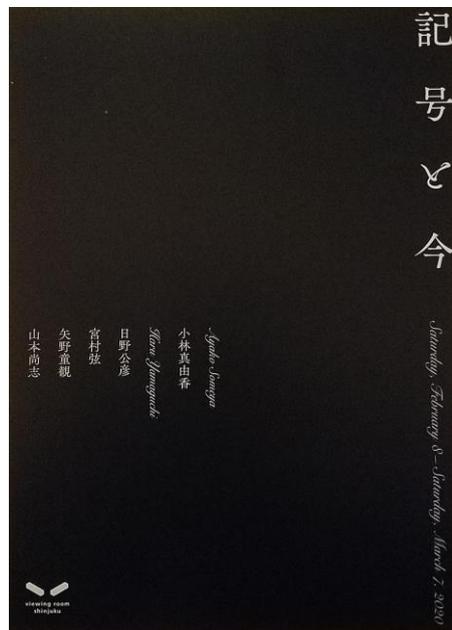
その瞬間、一刻も早くストレスから父を遠ざけることが私の役目になった。



### 「上を目指すタワーと下の自分」 2020年

東京で最も高いタワーから、戻らないと決めて地上に独り降り立った2018年秋の夜。

そのときの喪失感や恐怖と安堵が入り混じった感覚、光景。2020年になりその景色を眺めながら書いている。



現代アート書道の世界2 【記号と今】  
Yumiko Chiba Associates viewing room shinjuku

DOUKAN YANO  
矢野 童観

2019年6月21日~23日  
ART SHODO FESTA 2019  
(三鷹市芸術文化センター)



「上と下に区別される惑星」2019

「上と下に区別される惑星の一部」2019（上段左と下段右の2点）

昨冬制作した“曖昧な上と下の集団の分裂”の横にちぎれた部分から、以前強くイメージしていた“上と下”の縦方向の力関係だけでなく、横方向の連なりに対する意識も強く働くようになり、その横の連なりが際限無い究極の状態として円形の“惑星シリーズ”が誕生した。





ART SHODO FESTA 2019  
三鷹市芸術文化センター

DOUKAN YANO  
矢野 童観

2019年4月11日~14日  
ART SHODO AWARD  
(品川区 O美術館)

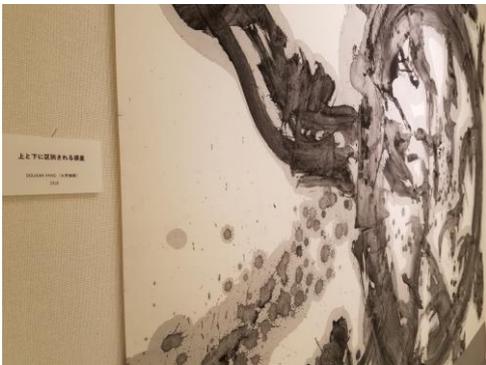


「上と下に区別される惑星」2019      「二つの曖昧な上と下の集団」2019

2018年冬以降、会社を辞め自由になれたはずの私にも、そのような違和感を消すことはできていない。が、昨冬制作した作品“曖昧な上と下の集団の分裂”の横にちぎれた部分から、以前強くイメージしていた“上と下”の縦方向の力関係だけでなく、横方向の連なりに対する意識も強く働くようになり、その横の連なりが際限無い究極の状態として円形の“惑星シリーズ”が誕生した。2019年は、そんな違和感や矛盾が重なり連なった世界と、それはその中の一部分が連なって形成されているのだということを強くイメージしながら書いて行こうと考え、そのスタートとなる「ART SHODO AWARD」ではこれまでで最大サイズの作品展示となる。



ART SHODO AWARD  
品川区 O美術館



DOUKAN YANO  
矢野 童観

2018年12月1日~9日  
ART SHODO NOW  
—書道の新たな展開—  
(ギャラリーNOW・富山)



「曖昧な上と下」 2018

「二つの曖昧な上と下の集団」 2018



「二つの曖昧な上と下の集団の分裂」 2018



「二つの曖昧な上と下の集団の分裂」2018

ART SHODO NOW  
—書道の新たな展開—  
ギャラリーNOW・富山



ART SHODO NOW  
—書道の新たな展開—  
ギャラリーNOW・富山

七重奏 —「ART SHODO NOW」に寄せて

現代の書は「絵としての書」と「文字としての書」の両極のあいだで、不毛なバランスを模索してきた。「不毛」と言う理由は、前者と後者が、独立した極と言えるほど分離していないからである。外国人の立場を想定すれば自明であるように、あらゆる文字は、有意の記号であると同時にただの画像である。あらゆる文字は、二極のあいだというよりも、二重の存在なのだ。そもそも書とはこの二重性の芸術であった。さらに「有意」のほうも、突き詰めれば曖昧である。言語的な意味がわからなくても、絵文字は意味を伝えられる。文字を用いる文化の人間は、たとえ読めなくても — 未解読の古代文字や暗号のように — 「意味ありげ」な絵の羅列を文字として認識できる。絵と文字のあいだ、「見る」と「読む」のあいだで書を位置づけようとする行為は、その「あいだ」が曖昧なので当然のように不毛であり続けてきた。

再現芸術であり造形芸術であり時間芸術でもある書は、音楽をモデルにするとわかりやすい。禅語のような定型句を揮毫する書家とは、クラシックの定番を演奏するピアニスト（基本白黒ということで楽器はピアノ）のような者であり、優れた建築をときに「凍れる音楽」と形容しバッハの音楽を大聖堂に聴かせるように、音楽もまた時間芸術と造形芸術の両面を合わせもつ。さらに、音楽もまた「歌」というかたち

で、言語と本質的な関係をもっているからである。読める書とは、音楽で言えば「歌える」歌。「歌詞の意味がわかる」歌のことであろう。音楽のリズムは書の筆致や筆勢に、メロディラインは文字の形態に相当する。文字が読めないのに書の好きな外国人とは、歌詞も聴き取れないのに洋楽に夢中な日本人と同じというわけである。

ただし最も本質的であるのは、音楽が／書が、リズムとメロディのその先で／筆勢や文字形のその先で、音楽／書だけで語るときである。そのとき語られるものは、我々が通常理解する意味のシステムからあふれ出た過剰である。この過剰分は音楽／書にしか表現できない次元にあり、言語的な意味には還元されない。現代の音楽は、本質において現れるこの過剰分を追求して、無音からホワイトノイズに至る音現象を包括しつつ、世界のあらゆるジャンルや技法や音楽語法を通過して著しく多様化してきた。それに比べると、現代の書は冒頭の二元論が軛となって、ほとんど多様化していないように見える。ART SHODO は、書を未開の多様性へと開く運動であろう。ここに集められた7名の書家は、互いに異なる7つの聴き慣れぬ書を奏でているのである。

清水 楓 (美術評論家)



Ayako Someya  
Everything starts from believing in yourself.  
2018年  
137 × 35 cm



グウナカヤマ  
無18  
2018年  
123 × 157.5 cm



開田 智  
通化師  
2018年  
60 × 47 cm



Haru Yamaguchi  
Gravitation  
2018年  
67 × 68 cm



菅広  
2018年  
108 × 78.3 cm



矢野重観  
曖昧な上と下  
2018年  
69.5 × 51 cm

出品作家

Ayako Someya、開田智、菅広、グウナカヤマ、Haru Yamaguchi、矢野重観、山本尚志

トークイベント「書道と現代アートの接点」12月9日(日) 14:00～  
山本尚志(書家)×富山剛成(ギャラリーNOW)

「ART SHODO TOKYO」より選抜された7名の書家によるグループ展。

展覧会概要

展覧会名：ART SHODO NOW—書道の新たな展開—

会期：2018年12月1日(土) - 12月9日(日)

開廊時間：火曜-土曜 10:00-18:00 日曜 10:00-17:00

休廊日：月曜

後援：北日本新聞社

協力：Yumiko Chiba Associates

会場：ギャラリーNOW 〒930-0944 富山県富山市開85 TEL 076-422-5002

ART SHODO NOW  
—書道の新たな展開—  
ギャラリーNOW・富山

DOUKAN YANO  
矢野 童観

2018年10月12日~14日  
ART SHODO TOKYO AUTMUN 2018  
(三鷹市芸術文化センター)



左から

「明確な上と下」2018

「明確な上と、曖昧な上と下の集団」2018

「曖昧な上と下の集団」2018

「二つの曖昧な上と下の集団」2018

「二つの曖昧な上と下の集団」2018

「曖昧な上と下」2018

#### 上下シリーズ

組織や集団の中に存在する人間の上下関係、階層、その関係性によって構築される不可解で不可避な集団の様子などを、上と下の二文字によって表現している。

個々の作品の着想は、巨大資本による企業買収、業界や企業の構造や実態、所属する組織や集団内の人間関係・主従関係、一世を風靡したディスコの様子など様々だが、全て作者自身とその周囲に起こった事実や実体験によるものである。

